様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月 １９ 日現在

機関番号：２２６０４
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2012～2014
課題番号：２４７２０２０８

研究課題名（和文）日本語文法研究史における『春樹顕秘抄』と『春樹顕秘増抄』の位置づけについて

研究課題名（英文）the kind of diachronic TENIWOHA theory: " Shunjukenpisho " and " Shunjukenpizousho "

研究代表者
劉　志偉（LIU, ZHIWEI）

首都大学東京・人文科学研究科（研究院）・助教

研究者番号：００６０５１７３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,400,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究は中・近世に流布されたテニヲハ論書の記述を通して、当時の日本人の文法意識の変遷を明らかにする通時的なテニヲハ論研究の中に位置づけられる。取り上げる文献は、初期のテニヲハ論書「姉小路式」の増補本系列に属する『春樹顕秘抄』と『春樹顕秘増抄』である。その記述の調査と分析を通して、両書の著者がどのように「姉小路式」の記述を踏襲し、また自らのテニヲハ観を取り入れて後世に伝えようとしたのかを明らかにする。テニヲハ論書が具体的にどのように江戸期の日本語学研究へ繋がったのかという日本語文法研究史の断片史を明らかにする。

研究成果の概要（英文）：This paper is in the tradition of the kind of diachronic TENIWOHA theory research which explains the change in Japanese grammatical consciousness during the middle and late medieval period through the accounts of TENIWOHA textbooks which gained currency during the time.It treats the " Shunjukenpisho " and " Shunjukenpizousho " examples of early TENIWOHA manuals literature which are expanded versions of the " Anegakouji-shiki ".Through examination and analysis of these accounts, it clarifies how the author of both texts continued the " Anegakouji-shiki " accounts but also how they sought to transmit their own ideas of TENIWOHA to posterity. It provides concrere insight to the fragmented historical research area treating how TENIWOHA manuals led taj to edo-period grammatical research.

研究分野：人文学言語学日本語学

キーワード：テニヲハ論　春樹顕秘抄　春樹顕秘増抄　増補姿勢

１．研究開始当初の背景

日本語文法学の研究は、初期のテニヲハ論書から始まったと言っても過言ではない。本居宣長（1730～1801）や富士谷成章（1738～1779）をはじめとする江戸期の日本語学の研究が体系性を有するのに対し、それ以前のテニヲハ論書は歌学を研究対象とし、和歌作歌上の個々の文法現象について証歌を挙げて説明する傾向があり、文法論としての体系性を欠くため、旧派とも称される。栂井道敏（1725～1785）著『てには網引綱』がその中間に立つ過渡的な書である。旧派のテニヲハ論書に関する書誌学研究がある一方、それらの記述内容が具体的にどのように『てには網引綱』を経て江戸期の日本語学の研究につながったのかについて必ずしも明らかにされたとは言えない。

因みにここでいう初期のテニヲハ論書とは、『手爾葉大概抄』「姉小路式」『手爾葉大概抄之抄』の三冊のことである。中・近世のテニヲハ論書は大きく２つの系統に分けられる。一つは藤原定家の仮託の偽書『手爾葉大概抄』と、飯尾宗祇による注釈書『手爾葉大概抄之抄』である。もう一つは著者不詳の「姉小路式」と呼ばれる一群秘伝書と、その増補系列である。『手爾葉大概抄』系列の増補本は『手爾葉大概抄之抄』しかないのに対し、「姉小路式」は近世まで種々の増補本が見られ、テニヲハ論書の最大な勢力を成していった。

本研究の対象となる『春樹顕秘抄』（著者不詳）と『春樹顕秘増抄』（著者有賀長伯1661～1737）は、「姉小路式」の直系増補本と増増補本である。両書は、文法論としての体系性を欠くその記述態度や、用例の観察において、今日の視点からは品詞論的に正確とは言えないことからあまり重要視されてこなかった。しかし、筆者は文法研究意識の変遷という視点から、日本語文法研究史において『春樹顕秘抄』と『春樹顕秘増抄』とが具体的にどのように初期のテニヲハ論書を踏襲したのか、また過渡的な書とされる『てには網引綱』へとどのようにつながっていったのかを明らかにする必要があると考える。

２．研究の目的

本研究の主たる目的は日本語文法研究意識史の変遷における一断片史を明らかにすることにある。具体的には、『春樹顕秘抄』『春樹顕秘増抄』の二書の著者がどのように先行の書「姉小路式」の記述を取りいれて増補したのか、増補を行う際の姿勢に異同はあったのか、あるとすればどのような相違が見られるのか等の点を明らかにすることにより、日本人による日本語文法研究史におけるこの二書の位置付けを行いたい。

３．研究の方法

「姉小路式」の直系増補本には『春樹顕秘抄』と『春樹顕秘増抄』がある。これまでの日本語史概説書では、『春樹顕秘増抄』は有賀長伯が『春樹顕秘抄』を大幅に増補したものであると説明されるのみであった。しかし、『春樹顕秘抄』の著者が「姉小路式」を増補した際の態度と、有賀長伯が『春樹顕秘抄』を増補して『春樹顕秘増抄』を著した態度とは必ずしも一様ではない。前者が「姉小路式」の秘伝性にとらわれ、その記述を理解しないままに踏襲しようとしたために、曲解してしまった箇所も認められるのに対して、有賀長伯は従来の説を踏襲しつつも、自らのテニヲハ観に基づいた増補も行ったと考えられる。従来の説の過ちから抜け出せなかった箇所はあるものの、従来の説明を改めようとする姿勢が認められる。こうした増補する姿勢の異同を明らかにするために、筆者は『春樹顕秘抄』『春樹顕秘増抄』の項目と記述を手がかりに、二書の祖とされる「姉小路式」の項目との増減関係、具体的な記述との異同について調査を行うため、一覧を作成した。これをもとにさらに以下の点を中心に調査及び分析を行った。

ⅰ）「姉小路式」の記述を踏襲した項目についての考察
ⅱ）新たに加えられた項目についての考察
ⅲ）後世のテニヲハ論書に与えた影響

４．研究成果

（１）近世の文法研究が中世歌学研究の蓄積に基づくものであることは、日本語文法研究の世界においては言わずもがなの共通認識であろう。しかし、テニヲハ論書の記述内容を今日の文法研究の水準からはかると低いことから、さほど焦点を当てられて来なかったとも言える。福井（1964a,b）、根来（1980）、テニハ研究会（2003）、根上（2004）といった専著のほか、飯田、井上、大秦、小柳、佐田、佐藤、永山らによる一連の個別研究が挙げられる。テニヲハの研究史に関しては、山田孝雄の『国語学史要』（1935）『国語学史』（1943）をはじめとしていくつかの記述があるが、この数十年の間に世に出された日本語史の概説書に、説かれている内容は、いずれも井上（1964）と根来（1980）の域を出ていない。無論、この間に全く進展が見られなかったわけではない。少なくとも以下の点については明らかになったと考えられる。

①初期のテニヲハ論としては『手爾葉大概抄』、「姉小路式」、『手爾葉大概抄之抄』の三書が挙げられる。『手爾葉大概抄之抄』は宗祇による『手爾葉大概抄』の注釈書である。これらの書の言及する内容について、従来の研究では「歌の留り」「手爾葉の意味・用法」「呼応関係」の内容的な三点から捉えられて

きた。しかし、「姉小路式」の巻立てや項目立てには著者による意図性が認められ、その巻立てが一定の体系性を有する点で『手爾葉大概抄』と異なる（劉 2012）。
②連歌論とテニヲハ論との間に関わりがあることについては従来の研究においても言及されているが、詳細な考察はなかった。劉（2012）では、両者がどのように影響し合ったのかが具体的に提示した。
③テニヲハ論は初期の秘伝性から次第に脱却し、江戸期には公刊も行われるようになった。その過渡的な書『てには網引綱』の著者栂井道敏は、中世のテニヲハ論を代表する『手爾葉大概抄』と「姉小路式」の二つの流れに対して批判的な態度を取っていた。従来のテニヲハ論が秘伝に徹した姿勢への反発に、『てには網引綱』のような過渡的なテニヲハ論が世に現れる萌芽が含まれていたと考えられる（内田 1997）　。

しかし、テニヲハ研究史に関する大まかな流れを示す概説書があったとしても、実際旧派のテニヲハ論書から江戸期の日本語研究へとつながったかについては専論をみないのが現状である。従来はこのように暗黙の了解とされてきたが、筆者は旧派テニヲハ論と江戸期国語研究とのつながり（具体的な流れ）を敢えて稿を設けて再整理することとした。具体的には、先学の学恩を負いつつ、さらに近年の研究成果をも取り入れて、筆者は『八雲御抄』『手爾葉大概抄』『てには網引綱』の三書を転換点に捉えて、テニヲハ意識発生から『てには網引綱』に至るまでの旧派テニヲハ研究史の再整理を試みた。

こうすれば、飛田良文他（2009：730）『日本語学研究事典』における「手爾葉大概抄（４文法）に対する以下の問題提起についても上記の流れの中で解釈することが可能となろう。

> 連歌論書でテニヲハが幅広く論ぜられるようになるのは、十五世紀後半以降のことである。『手爾葉大概抄』の取り上げるテニヲハを見ると、室町初めの成立と考えた時、あまりにも整い過ぎていると感じられる。（佐藤宣男執筆）

また、本研究において最初の問題設定は、『春樹顕秘抄』と『春樹顕秘増抄』の増補姿勢の異同についてにあった。しかし、『春樹顕秘増抄』に見られる著者のテニヲハ論をより全体的に概観するためには、この書と同じ著者を持つ有賀長伯の『和歌八重垣』をも考え合わせる必要が出てきたため、新しい研究課題を申請することとした。有賀長伯のテニヲハ観を明らかにするという新しい研究課題の解明とともに、『春樹顕秘抄』と『春樹顕秘増抄』の増補姿勢の異同を示す研究を進めている。両者を合わせて論文として発表する予定である。

（２）一方、日本語そのものに対する文法意識という視点において、テニヲハ論と日本語教育文法との間に相通ずる点が認められる。前者は、邦人に和歌の詠歌上のテニヲハを教えるものであり、当時の日本人の文法意識を反映するものである。このような当時の日本語に対する「言葉の指導」という見地は、現代日本語教育にも寄与できる点があると思われる。筆者は、旧派のテニヲハ論書における「筒（つつ）」の項目に注目して通時論的視点を取り入れた文語文法の項目指導について試論を発表した。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計２件）

① 劉志偉、「通時論的観点を部分的に取り入れた文法指導の試み―旧派テニヲハ論書における「筒」（つつ）項目の記述に触発されて―」『武蔵野大学日本文学研究所紀要』第 2 号、pp.4-21、査読あり、武蔵野大学日本文学研究所、2015 年 3 月
② 劉志偉、「テニヲハ研究史の再整理」『都大論究』50、pp.19-38、査読あり、東京都立大学国語国文学会、2013 年 6 月

〔学会発表〕（計４件）

① 劉志偉　「旧派テニヲハ論書『和歌八重垣』を紐解く」第 10 回国際日本語教育・日本研究シンポジウム、2014 年 11 月 15 日～16 日　香港大学港大保良区書院（香港、中国）
② 劉志偉　「通時的視点を部分的に取り入れた文法指導―旧派テニヲハ論書における「筒」（つつ）項目の記述に触発されて―」第六回漢日対比語言學研討会　2014 年 8 月 20 日～21 日　中国人民大学（北京市、中国）
③ 劉志偉　日本語史におけるテニヲハ論書に関するいくつかの問題点について　第五回漢日対比語言學研討会　2013 年 8 月 21 日～22 日　福建師範大学（福州市、中国）
④ 劉志偉　関於テニヲハ論的一些問題―従日語語法史角度加以再整理―　以文会 2013 年 1 月 27 日　青山学院大学（東京都渋谷区）

〔図書〕（計１件）

① 劉志偉、『「姉小路式」テニヲハ論の研究』京都大学学術出版会、2012 年 6 月、pp.1-344、（プリミエ・コレクション 13）

〔産業財産権〕
○出願状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：

種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者　劉　志偉
（LIU　Zhiwei）
首都大学東京人文科学研究科・助教
研究者番号：00605173

(2)研究分担者
(　　)

研究者番号：

(3)連携研究者
(　　)

研究者番号：